

雨宿り

ほっか

降り始め

・里美・・・高校2年生の少女

下校途中の里美の頬に何か冷たいものがあたった。

彼女はとっさに上を見上げ、その冷たいものが何なのかをすぐに理解した。

空は白い雲に覆われており、乾いた灰色のアスファルトの地面には小さな黒い丸がまるで模様のようについている。

雨だ。　　そういえば傘を持っている人がたくさんいたな。　　はあ～。　　天気予報をしっかりと見ておけばよかった。

里美は傘を持ってはいなかったが、慌てることもなかった。

なぜならちょうどすぐ横にバス停の待合小屋があったからだ。

雨が降り終わるまでここで待っていればいいのか…。　　濡れてまで急いで帰る必要もないしね。

待合小屋の中は意外と広く、そして掃除もしっかりとされていた。

置かれている長椅子もまだ新しく、学校の校庭に置かれているものなんかよりもよっぽどきれいである。

里美は長椅子に腰を下ろし、鞆の中から読みかけの小説を取り出した。

外の雨は徐々に強くなってきたが、まだ傘をさして歩く者と傘なしで歩く者は半々だった。